20180511

沖永良部紀行・土壌学事始

緒方（おがた）　一（いち）　株式会社海洋計画

二月中旬に業務で沖永良部島へ出かけた。ターボプロップエンジンの小型航空機は、たいして揺れることもなく「えらぶゆりの島空港」へ着地した。沖永良部は農業の島である。百合の生産地で有名である。明治三十年代から球根の輸出が始まったといわれている。仕事は予定よりもはやく終わり、オーシャンビューのホテルにチェックインした。夕食までには時間があったので少し歩くことにした。高い防波堤に上がってみる。波消しブロックの向こうにおだやかな海がみえる。よく整備された港湾なのだが船舶はほとんどいない。漁師が一人岸壁で網の仕掛けをしつらえていた。声をかけると明日の漁の準備だと言う。陸揚げされた船舶が広い港のなかでカラコロと音をたてていた。知名漁港である。西の方では港湾工事が行われている。

店の前で男が座っていた。あいさつをすると話しかけてきた。むかし島を出て都会に働きに出たという。家を継ぐために帰ってきたのだと言う。店は電気屋と酒屋、雑貨もあるようだ。客が缶ビールを買いに来た。常連の自衛隊員である。島には航空自衛隊のレーダーサイトがあるのだ。立派な港の話をすると、島には漁師がいないと言う。さっきあった漁師は兼業漁師なのだ。

観光はシーズンオフだと思っていたらホテルのレストランは満席である。文庫本を読んでいる初老の男、若い添乗員とおぼしき女性、みんなそれぞれの方向を観ている。開高健の「新しい天体」よろしく美味を期待したが、海の幸は食卓にのぼらなかった。やはり漁師はいないのだ。

島の土は概して赤い。この島は隆起石灰岩で形成されている。これはラテライト性赤土であるらしい。「九州・沖縄の特殊土」「1983/07 山内豊聡」には「国頭（くにがみ）まあじ」が沖縄地方に分布するとある。これは「島尻マージ」かもしれない。鹿児島県の北西部にある長島の土も赤かったなと思いながら写真を撮る。博識のＳに尋ねると、あれは「真土」が語源だと教えてくれた。ドクチェク（1899－1992）によれば、土壌（Ｓ）は以下のように表現される。

Ｓ＝ｆ（cl、o、ｒ、ｐ、ｔ）

ここに　ｃｌ：気候、o：生物、ｒ：地形　ｐ：母材　ｔ：時間　である。土壌学者はこんな多変量関数を扱うのである。サトウキビやジャガイモ、百合の球根はこれらのＳのなかで育つのである。

立ち枯れの樹木が数多く目にはいる。白いので目につくのだが、松の木であるらしくこれは後日、奄美大島を訪れたときに判った。奄美大島も松食い虫によって松の木が大量に枯れていた。奄美大島で海水から塩を精製している男たちに話しを聞いたのだ。薪をくべて海水を煮詰めるのであるが、あの松の木は使わないのかと尋ねると駄目だという。これらはリュウキュウマツと言う沖縄県の県木である。（写真は昇竜洞入口）

20180511

鍾乳洞が多数ある、昇竜洞にいってみた。６００ｍほどが公開されている。園丁が数人売店の食堂で朝食をとっていた。園路にはコミカンが色づいている。洞内には水が循環されている。途中で水音は途切れてしまった。そういえばホテルの近くにケービング会社があった。今はシーズンオフだ。

東シナ海の海の色は群青色である。僕らが行った数日後にザトウクジラの群れが観られたらしい。フーチャと呼ばれる海食洞がある。荒天時には潮が吹き上がるので塩害防止のために多くが破壊されたらしい。数メートルの高さで積まれた防潮壁がある。電柱は潮風で鉄筋がむき出しになっている。住家の軒先が潮風でボロボロになっている。無人と思って踏み込むと、人がいた。女性は、かって大島紬を織っていたという。話しながら爪を切り始めた。病気をして仕事をやめたと言う。風が吹いて何かがカラカラと飛んで行った。

和泊には西郷南州記念館という小さな展示館がある。饒舌な女性学芸員がテレビドラマの史実の誤りを話してくれた。学芸員では無いと本人はいうが立派な見識を持った学芸員である。コンビニエンスストアで昼食を取った。ここには、食堂らしきものがどこにも無いのだ。携帯電話の中継アンテナの高さが低い。民家の屋根は切妻ではなく寄棟である。台風に近い島なのだと思う。

いたるところにため池が造られている。水田は全くないという。畑作で経済が成り立っている。若い人をほとんど見かけることができなかった。

フーチャ　海食洞

日本列島の島弧の形成過程で、隆起石灰岩の島がいくつあるのか知らない。のちに訪れた奄美大島や種子島とは明らかに異なった風景があった。かって沖縄で天候回復を待って過ごした日々を懐かしく思いだした。奄美大島の鶏飯について、美味しいものの発見は、新しい天体の発見以上のものである。